

4. 中高一貫カリキュラム (学力・評価)

学力を考える

中高一貫カリキュラム研究グループ

1 はじめに

中高一貫カリキュラム (学力・評価) 研究部会は、昨年度の「21世紀の学力研究部会」の成果を引き継ぎ発展させる目的で組織された。「21世紀の学力研究部会」(=省略して21世紀学力部会)では、本校の求める「学力」=「21世紀の学力」を「8つの学力」と「2つの基礎力」という仮説を立てて論議を重ね、中等教育研究協議会での研究成果の発表となった。

また、元校長でもある安彦先生より、「8つの学力」とガードナーのMI理論との関係も指摘を受け、こちらの方面の検討も加わった。これらの論議を受けて、本研究部会が今年度活動することとなった。

2 活動目標

本研究部会が今年度の活動目的としてあげたのが以下の項目である。

- ・「21世紀学力部会」の到達点と成果・課題の検討
- ・中高一貫カリキュラムにおける学力評価
- ・教科の学力と中高一貫カリキュラムの関連
シラバスの検討 「本当」に必要な中高一貫の教科のシラバス
- ・目標とする学力とは何か
- ・昨年度の「8つの学力」と「2つの基礎力」の検証と理論化
本校の教育目標として打ち出せるものになりうるのか?
東大附属は「5つの力」
「ことばの力」「理論の力」「身体・表現の力」
「情報の力」「関係の力」
- ・事例研究・先進校研究 夏休みに研究・調査実施
①ベネッセ総研②品川区立富士見台中学③暁星国際学園ヨハネの森研究コース
- ・学習活動を主体に ガードナー MI理論の学習
- ・的場先生を囲んで学習会
- ・系統的なアンケートの実施
これまでの実績を考慮しながら、比較的容易なアンケートの実施を検討

本研究部会が、「21世紀学力部会」から引き継いでさらに発展させるべき内容は、「8つの学力」の検討とこの学

力理論をベースとして各教科の教育内容を再検討し、中高6カ年のシラバス作成の基礎的な研究を行うことである。

また、研究協議会における「21世紀学力部会」分科会報告で共同研究者として報告して頂いた小川克郎先生(前名古屋大学環境学研究科教授)と「8つの学力」についての学習会を本研究部会として行うことにした。小川先生は、「8つの学力」について、実際の学習の場面ではそれぞれの「学力」がどのように機能しているのか、学習のプロセスから検討をして頂いていた。

3 活動経過

- | | | |
|-------|------|-----------------------|
| 6月3日 | 第2回 | ガードナーの学習 MI理論紹介のビデオ視聴 |
| 6月24日 | 第3回 | 「8つの学力」について学習会 方針の検討 |
| 7月12日 | 第4回 | 小川先生を囲んで学習会 |
| 8月27日 | 第5回 | 報告準備とアンケート方針の検討 |
| 8月31日 | 研究会議 | 中間報告 |

4 学習会報告

(1)小川先生との学習会

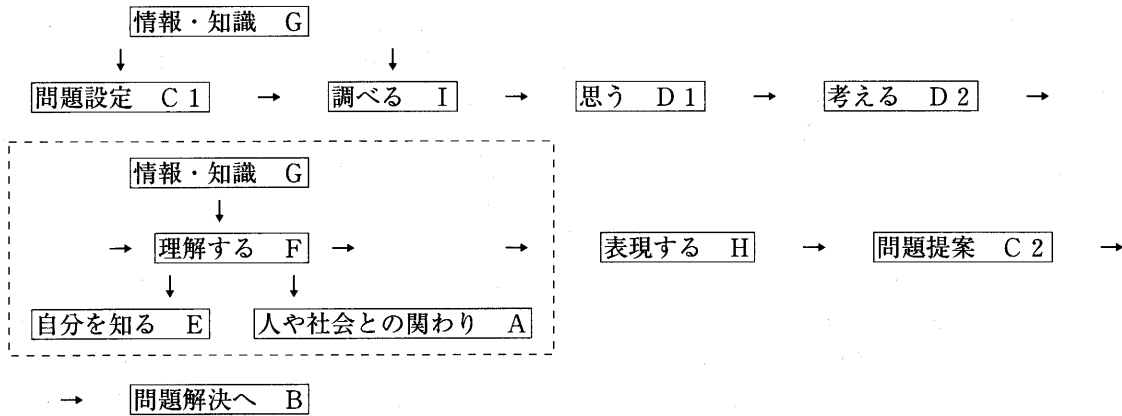
小川先生の大学でフィールドワークの授業から、「8つの力」・「2つの基礎力」と学習プロセスとの関連させて考えると

- ・小川先生の資料より
「8つの力」が学習活動の中で、どのような関係にあるのかわかりやすくするために記号をつけて、流れを図にまとめてみた。

・「8つの学力」の系統化

A人や社会と関わる力 B問題を解決する力 C問題を設定する力 D思考する力 E自分を知る力
F理解する力 G情報や知識を使う力 H表現する力 (I 調べる力 = 小川先生が設定した力)
「調べる力」= よろこび・発見・好奇心 である。

・学習のプロセス



情報・知識 G をベースに 問題設定 C1 をし、
調べる I て、そして 思う D1 考える D2
ことを行い 理解する F この時に 人や社会との関
わり A さらにこの時 自分を知る E ことにな
る。そして、表現する H 問題提案 C2 問題解決
へ B とつながっていく。この繰り返して、学習をし
ていくことになると言うことである。これは、小川先生
が実際に大学の授業の中で実践されていることであっ
た。

(2)MI理論の学習会

MI理論とは？

Gardner (Gardner 1983) は7つの知能 (Intelligence) の存在を唱えた。(最近では8つめの知能を加えている。)

それは、

①言語 (Linguistic Intelligence)

言葉を有効に効率よく使うことができる

②論理・数学 (Logical-Mathematical Intelligence)

数字を効率的に扱え、理論づけて考えることが出来る

③空間 (Spatial Intelligence)

視覚・空間的な世界を正確に捉えることが出来、それをまた別の形に直すことが出来る

④身体・運動 (Bodily-Kinaesthetic Intelligence)

身体を使い考えや感情を表現しすることが出来、器用さを必要とする作業を効率よくすることが出来る

⑤音楽 (Musical Intelligence)

音楽的刺激を上手く受け取り、聞き分け、変更・変形し、表現することが出来る

⑥対人関係 (Interpersonal Intelligence)

他人の気分、意思、動機、感情などを理解し峻別することが出来る

⑦自己内省 (Intrapersonal Intelligence)

自分の事を知り、それに応じた行動が出来る

(⑧ (Naturalist Intelligence) 自然との共生能力) である。

・MI理論の支柱とは？

知能と呼ぶための8つの条件がある。

1. 脳の特定の分野で処理が行われていると思われる
 2. 特定の知能のみが極端に優れている人が存在する
 3. 特定の中核となる操作、もしくは一連の操作が存在する
 4. 人類史的な発展、生物進化上妥当である
 5. 各知能それぞれに特定の発達パターンがある
 6. 実験心理学的タスクによる実証できる
 7. テストによってある程度測定可能
 8. 各知能の表現を象徴化できる可能性を持っている
- このような、条件を満たした知能を人は生得的に全て持っており、生物的に潜在的能力は決まっているものの、ある程度までは教育や訓練で伸ばすことが出来るとした。

・学校でのMI理論の可能性は？

MI理論は学校での教育・学習活動をどのように変えていく可能性を持っているのか。

*MI理論は生徒の多様性を許すだけではなく、積極的に肯定することをささえる。(Simeone 1995) .

*教師側 (そして総体としての学校) には全ての生徒

がそれぞれの潜在的な知能を伸ばすための教育が行われるようにする責任が生じる (Armstrong 1994)。

- * 教室活動の中では様々な知能を刺激するような教室活動が求められる
- * 従来の教室活動では付いて行きにくかった生徒に対して特に気を配る必要
- * 学習方法の向き不向きに適合した教え方 (learning style p27 and teaching strategy p52、58) (Armstrong 1994)

というように生徒の多面的な能力を認めることにより、より豊かな教育活動を保障することができると思われることができる。

・MI理論の多文化社会への適用

MI理論は少数の指標で見ていた事柄に、複数の指標を導入することによって、それまで軽視されていた事柄を新たな視点から再評価し、周辺に位置付けられていた人々を正当に評価しなおすことを可能にする。しかも、この一連の変化が周辺に位置付けられていた人々だけでなく、以前からの主流指標の枠の中で高く評価されていた人々にとっても利益になり得るということに対して理論的裏づけをすることの出来る可能性があることもMI理論の面白いところである。

5 今後の方針

① 8つの学力とMI理論をベース（仮説）として、教科の中でこれらの「力」をどう位置づけるか検討する。各科へ以下のことを依頼する。

目指す「力」と目標を検討 → シラバスの作成資料

『マルチ能力が育む子どもの生きる力』

トーマス・アームストロング著
吉田新一郎訳 小学館(2002年)

② 来年度4月にアンケート実施 ①の内容からアンケート項目の決定

成果を計るために秋にもう一度アンケートを実施

(山田孝)

6 学力論研究視察報告

(1)視察先と目的

- ① ベネッセ教育総研（岡山市）
 - ・総合学習と生きる力の細かなアンケート分析のデータをいただく。
- ② 品川区立富士見台中学校（東京都品川区）
 - ・ガードナーのMI理論を基にした「系の学習」で文科省研究開発を实践しておりその内容をうかがう。
 - ・外部評価の实践についてうかがう。
- ③ 暁星国際学園ヨハネの森研究コース（千葉県木更

津市)

- ・教科とは違った学力観で、全く新しい教育を实践しており、その学力観や教育方法、評価などについて話をうかがう。

(2)視察報告

① ベネッセ教育総研（主任研究員 田中勇作氏）

ベネッセ教育総研のウェブページ (<http://www.view21.jp/index.html#report>) で、総合学習と生きる力の関係について、その理論と実践結果のアンケート調査を見ることのできたので、その調査をするに当たっての学力観や調査内容を詳しく聞くことを目的として訪問した。

総合学習と生きる力の関係を理論付けしているのは、大阪教育大学教授の田中博之先生を中心としたグループで、主に大阪教育大学附属中学の先生たちが構成メンバーとなっている。基本的には「確かな学力」を「教科学力」、「生きる力」、「学びの基礎力」の3つから構成されるという仮説を立て、それぞれの相関から何が学力向上にとって必要なかを分析するという調査を行っている。(資料1参照)

本校の「8つの力」と「2つの基礎力」は、この3つの領域を分けることなく網羅した考え方なので、一概に比較をすることはできないが、特に総合学習は「学びの基礎力」をつけさせることのできる重要な場であるという結果が出ていることは、本校の昨年度実施したアンケート調査で総合学習が高い平均値をマークしたことと同じ結果が出ていると考えて良いのではないかと考えられる。

アンケート用紙に一部をもらうことができたので、学力アンケートの参考にしたい。本校でも、総合人間科の評価をする際に、身に付けられた力を確実に生徒や保護者に伝えられるようにするべきではないかと考える。総合人間科の授業を行うだけでなく、教師がその授業で身に付けさせたい力をきち意識して生徒を観察することにより、新たな評価のあり方や新たな授業の組み方が考えられると思う。

最後に、田中勇作氏からいただいたアドバイスは、「育てたい力をはっきりさせただけでは不十分で、その力が付いたかどうかははっきりさせるために、『この学年ではこういう事がこれくらいできるようになること』といった、学年進行での達成課題を用意しておかないと、どれだけその力が付いたかわからない。」というものであった。つまり、育てたい学力ごとにシラバスが必要であるということだ。同じことをずっと同じように聞いているだけでは、昔からできていると考えてしまい、その力の伸びを知ることはできない。

別件であるが、大阪教育大学の田中博之教授は問い合わせのメールの中で、『8つの学力』と『2つの基礎

力』という考え方で学校で育てたい力を考えることは、基本的には賛成である。すべての教科で知恵を出し合って新しいことに取り組むことができるからだ。」というアドバイスをいただいた。教科再編や総合学習の見直し、新教科で付けさせたい力を測る物差しとしてきちっとした学力を規定することは重要であると実感した。

② 品川区立富士見台中学校 (菅谷正美校長)

学校のウェブページ (<http://www1.cts.ne.jp/~fujimi/>) で、文科省研究開発「系の学習」の実践を公開している。これは、系の学習でつける能力

1 系の学習で育てようとする学力は、社会生活の中で生きて働く知的活動的な能力である。教科領域の学習で細分された断片的な知識や技能の習得とは異なり、課題や問題に正対した時の分析・総合・推理などの思考力、状況に対応した判断力、新たなものを創り出す企画力や想像力などを各系の学習において融合・統合して、横断的・総合的で実際に使える能力とするものである。

2 従来の教科学習では、それぞれの教科の目標を達成することが児童生徒にとって学習することの目的であった。それに対して、系の学習では学習の視点を児童生徒一人一人の能力開発においている。そこで大脳の発達と子どもの能力開発を体系化したガードナーのマルチ能力理論を参考にして、従来とは異なる発想で一人一人の能力を発揮できるカリキュラムを開発した。(ウェブページより引用)

というように、まさにガードナーの8つの能力を付けさせることを目的とした実践である。ただし、育てる能力は8つとはしないで、「5つの系」にまとめている。(資料2参照) この5つの区分けは、幼児教育の分野と一致させているようだ。(筑波大学の7つの学群もの分け方も参考にしているとのこと。)理論的なことや助言は、筑波大学の田中統治教授によって行われ、他に田中教授が指導する院生もサポートして実践を行った。

「系の学習」は、富士見台中学校だけでなく、その下にある伊藤小学校と上神明小学校の3校共同で行われた。従って、そのカリキュラムは9年間にのぼるものとなっている。

具体的な実践研究のまとめや統計処理と分析を、富士見台中学の菅谷校長が自ら行い発表をしたそうである。

この実践のねらいは、ずばり教科の再編である。教科の学力と、社会で使う力のずれをなくすために、総合学習の時間を使って5つの系の力を付けさせるという明確な目的を掲げて実践を行い、その有効性や5つの力に分けることの妥当性等をアンケート調査し、分

析した結果を公表した。9教科を5つの系に分け、小中の先生を5つの系の分科会に分けてそれぞれでシラバスを作り、それに合わせた実践を考えて実行するという、かなりの労力と時間をかけた研究である。そこにもやはり、学年ごとのシラバスと達成課題が設定されていた。シラバスづくりと達成課題の設定は、今後の研究のあり方のスタンダードとなる過程であろう。シラバスは現行の学習指導要領と全く同じ体裁で作っており、容易に比較ができるように配慮されていた。アンケートでは、力が付いたかどうかという分析はもちろんのこと、5つの系の関連や、教科学力との関係にいたるなど多彩に行われていた。特に、5つの系の関連については、あまり関係ないという結果が示されており、このことから5つの系の力は独立したものであるという結論が導かれていることには驚きを感じた。緻密なアンケート分析や、成果の発表の表現方法のは見習うべき点が多かった。

もう一つの目的である外部評価については、地区のさまざまな人や学識経験者をメンバーにして何度か委員会を開き、その委員会が自主的に評価項目について検討し、ABCをつけるという形をとっている。その教科項目は教員全員にも同じ質問をしており、結果と今後すべき事を最終的に校長がまとめて文章化し、ウェブページで公開している。(資料3参照) きめ細かな外部への情報開示と評価委員会の開催で十分と判断しているため、生徒による学校評価は行っていないとのことだ。

いずれにせよ、意見をもらっただけではだめで、それに対してこうしていくという答えとその次の実行が必要な時勢となってきていることを実感した。

③ 暁星国際学園ヨハネの森研究コース (鈴木先生、大下先生)

学校のウェブページ (<http://www.gis.ac.jp/>) では一言では説明できないこの学校の取り組みが詳しく説明されている。(以下ウェブページより抜粋)

ヨハネ研究の森は、21世紀の人材に求められているコミュニケーション力・論理的思考力・創造力・問題解決能力を形成するコースとして、2001年4月に開設されました。一斉授業を廃止し、細切れの時間割をなくし、教科単位に分離されている現在の教科中心のカリキュラムを、リベラルアーツの観点から大胆に再編し、自然科学、社会科学、人文科学、情報科学の4分野と、学習の主要メディアをなす言語をカリキュラムの根幹に据えた新リベラルアーツ学習を目指します。

ヨハネ研究の森コースで行われる学習スタイルは、「自学」スタイルを中心に、知識受容型の「レクチャー」スタイル学習に加え、相互作用を期待する

「セッション」型学習、「ゼミ」スタイル学習、学習者に変容を促す「自己啓発」型学習、「体得」型学習、そして、学びの達人を前にしての「徒弟」的学びと多様で、これらを適材適所に組み込んで学習が進められます。

■主な学習スタイル

・自学

英・算・数・国・理・社の教科学習は、基礎基本を学ぶ大切なものとして、ヨハネ研究の森の中核の一つに据えられています。

各教科を細切れに学習するのではなく、一日中、英語の学習に取り組む研究員や、数カ月かけて数学のある領域をマスターしようとする者もいます。

・読書

学習の大半は「書きことば」を介して行われます。読書は、文字・活字を介した重要な学習行為として、ヨハネ研究の森では一日の学習時間の半分近くを費やして行われます。（F.V.R.「自由で自発的な読書」）

・セッション

学年を超えて、英語や数学に関するテーマを共有するメンバーによって構成された新しいグループ「参加型セッション」スタイルの学習です。扱う内容に詳しい人物をファシリテーターとして、コーディネイター役の主任研究員が、様々な質問を浴びせかけ、そのやり取りに研究員も一緒に参加し、理解を深めていきます。代表的なものに、「グローバル・セッション」があり、英語で、数学や物理学の領域について議論していきます。研究員は、レベルの違いはあっても、そのやりとりに見当をつけ、理解を深め、日本語を習得したときと同じプロセスで英語の習得を目指します。

特に留学を目指す研究員を中心に講座が開かれます。（対話型学習）

・ゼミ

共通のテーマを1年間かけて追求していくなど、ヨハネ研究の森の学びは中・高でも大学レベルの研究活動を行っています。

各主任研究員のもとに、ゼミ単位のグループが形成され、すでに明らかになっているとされる歴史的事象や科学の領域を、本当にそうなのかと、疑ってみることからはじめ、一旦未知のものとして仮説を立ててみて、これらの検証を行うなど、実社会ではあたり前に行われていることを学習の中に取り入れて行います。（仮説検討型学習）

・レクチャー

各領域の一流の専門家にお越しいただき、その領域についてはなしていただく機会を用意しています。（質疑応答型学習）

(1)AO入試制度を採用

通常の学力テストによる点数採点ではなく、アドミッションポリシーといわれる「ヨハネ研究の森コース」が期待する生徒の提示を行い、それに相応しい生徒を獲得する。

(2)募集概要

＜ヨハネ研究の森コースのアドミッションポリシー＞

1. 読書が好きであること。
2. 独自の才能をもっていること。
3. 努力することを厭わないこと。
4. 高い目標をもつものごとに挑戦できること。
5. 読み・書き能力が優れていること。
6. 物事を最低3つ以上の視点から見ることができること。

ア) AO入試選抜講座

受験希望者対象の講義とゼミ講座を行う。レポートやエッセイを提出。



表現能力が高いかどうかを判定する。

イ) AO入試

「自己推薦書」「自己学習史」を願書と同時に提出。

【書類審査】

読書量やエッセイからポテンシャルをはかる。独自の才能があるかどうかをはかる。入学目的がアドミッションポリシーに相応しいかどうかを見る。

【面接】

保護者同伴・保護者のみ・本人のみの面接を行う。

当日、文章を読んでレポート・エッセイを書かせる。

一人約2時間。

【合否判定】

AO入試委員が合議をし、合否決定する。

以上の内容から見てもこの学校が思い切ったやり方で教育を実践していることがわかる。

この学校は元々帰国子女に対応した全寮制の学校であったが、バブル経済の破綻以後、見る見るうちに生徒が減っていった。そこで、まるまる寮一棟を使って、新しい形の教育を模索していたところ、宮城県のNeoALEXという私塾の行っている教育方法を丸ごと取り入れた学校を作る事になった。この私塾は第2外国語の習得について研究している学者が、どのように母国語を習得しているかということに視点を置いて実践を行っている所である。この教育方法を取り入れた

上で、学ぶ喜びを感じられる教育をするために、教育方法を根本から検討し直して実践をする学校を設立した。

このクラスは縦割り、小学生、中学生、高校生が入り交じった集団となっている。このメンバーは卒業までほとんど変わらない。自学の時間には得意分野を持つ上級生に下級生が聞いて学習を進めることも多い。自学の時間は、図書室のような本がたくさんある部屋に、各個人の机と本棚があり、いつでも参考文献や教材を手にとって学べるようになっていた。学習進度はチューターと相談しながら決めていくが、学年ごとの進度にはあまりこだわらない。ただし、今後のセッションやゼミに参加するためにあまりにも遅れているようであれば、指導が入るようになっている。

この教育では、さまざまなことを割り切って考えている。例えば、大学入試はセンター試験に直接対応しているようなカリキュラムではない。生徒達はむしろAO入試に対応した学習を行っている。また、卒業も18歳が適齢だという考え方もしていない。自分の学習の習熟が納得いく時期が卒業だという考え方をする生徒が多いので、学年全員がそろって卒業することもない。

あるテーマについて、多角的に学ぶ場があるのも特徴である。毎年一人の人間をテーマにして、そこから歴史や文学、科学など多彩な分野に渡って分析し、発表し合って学んだことを共有してゆくやり方は、本校の総合人間科や新教科群の方法と似たところがあるが、それが、異年齢集団で、年間を通じて、全員で行うという点が大きく異なる。

発表の様子やできあがったレポートからは、教科の力とは別の学力が確実についてきていることがわかる。

この学校はそういった割り切った教育をするので、入試もそれに耐えうる生徒を採るというのはっきりしたポリシーがある。AOも割り切っているのである。

まとめ

以上3カ所の視察を終えて、改めて「8つの学力」と「2つの基礎力」を規定することの意味を考えてみた。

1 学校で付けることのできる力をはっきりと明示する。

従来から学校教育で生徒にどこまでのことをするのか明確な線を引くことはなかった。その結果、学校で行うべきことが不明確、あいまいになってきている。教科の力を付けることはもちろんだが、社会の変化から学校でしかできないことが多くなってきたことの実事である。そこで、学校でできることとできないことを明確にし、

できることは何かを明示するためにも、学校で付ける力を規定することが重要であると考ええる。

また、学校とはいえ、施設や人材にも限りがあるので、他の学校と比べてできることとできないことをはっきりさせることも大切であると思う。本校は、暁星国際学園のように、中学生から修士論文を書くようになるほどの力を多くの生徒に付けさせることはできないが、本校なりに、部活動である程度成果を挙げた上で、自分の生き方を考える力と、センター試験にも対応できる力を付けたりできるという利点はある。そういったメリットデメリットを受験生に明確にアピールした上で選択してもらうということも、今後していかなければならない。

2 研究開発で付けさせる力を明示する。

生徒に付けさせたい力は、時代と共に新たなものが出てくる可能性はあるものの、ほとんどが変わらないものである。しかし、本校はその存在価値から、研究開発をし続けなければならない学校である。今後さまざまな教育を実践していくことになるわけだが、そのたびに付けさせたい力を変えていくと、前の研究開発との関連にぶれが出てくることになる。研究開発の変わり目に在籍する生徒にとっては、納得できないことになるはずだ。しかし、付けさせたい力を明示して、その方法を変化させたという形で新たな研究開発をすることは可能である。教科再編にも、付けさせたい力を中心にして対応できる。これから先の本校のことを考えると、長期的に見て一度はこうした基本的な事をしっかりと論議した上で合意し、生徒や保護者、社会に発信しておくことはとても重要ではないかと思う。

3 研究や学校の評価に対応する。

「目標となる力について、このような形で研究を行い、その結果目標となる力が付きました。」というように報告をするには、教科や研究実践、行事や学校生活全般で共通の物差しを持っていることは重要である。これによって教科への影響や教科からの影響といった相関も調べることができる。「教科は教科の付けさせる力があり、研究実践とは異なる。」という立場で実践をするなら、その都度その教科と研究実践との関係を理論付けして、仮説を立て、それを実証しなければ、相関関係の有無を探る事はできない。そのようなことが必要な実践もあるかもしれないが、そうでなければ、共通の物差しで測ってしまう方が評価もしやすい。今後は研究開発に対する評価を公表することが必要になるため、長期的にそのことに耐えうるシステムを今作っておかなければならない。

4 新たな力が必要になることの実証のためになる。

今後時代が変化して、「8つの学力」と「2つの基礎力」という力では表すことのできない分野に取り組むことが

必要になって来たときには、従来とは異なる力を付けさせることをねらった研究であることをはっきりと明示できる。従来の付けさせるべき力を明示しておかないと、どうして新しいのか、何が違うのかをはっきりさせることはできない。

今回のこの部会の目的の一つに、「8つの力」と「2つの基礎力」という考え方の理論付けをすることが挙げられる。以下の本は、多様な学力観について書かれた理論書である。（まだ他にもたくさんあるはずだが、今村が知っていて読んだものはこれだけなので、他に知っている良い理論書があれば教えていただきたい。）

- ・ハワード・ガードナー著「MI：個性を生かす多重知能の理論」
松村暢隆訳 新曜社
8つの能力について書かれた本。
- ・トーマス・アームストロング「マルチ能力が育む子どもの生きる力」
吉田新一郎訳 小学館
ガードナーの理論を教育関係者向けにわかりやすく書かれた本。
- ・スターンバーグ「思考スタイル」
松村暢隆訳 新曜社
人はどのように考えることを好むのかについて焦点を当てて書かれた理論書。能力の使い方には好みがあり、人が生み出す結果は能力よりもその使い方原因

があるかもしれないという内容。

- ・ダニエル・ゴールマン「EQ 心の知能指数」
土屋京子訳 講談社（講談社＋α文庫）

IQが高い人が人生の成功者になるとは限らない。人生に成功するためには、これとは別の力（感情をコントロールしたり、他人への共感能力を持ったりすること）が必要であることをといた本。道徳やソーシャルライフにも関連する内容が書かれている。

最後に

学力についての考え方は多様にあり、本物といえるものが何であるかを考えること自体が無駄のように感じるほどだ。しかし、そのような考え方の中から、本校にあった考え方を選び、今後の実践にうまく使っていくことが重要である。そういう意味でも、仮説として規定した「8つの学力」と「2つの基礎力」という考え方がベストなのかとか、「8つの学力」「2つの基礎力」の中身はこれで本当によいのかとか、教科の学力に「8つの力」と「2つの基礎力」を対応させてみたり、総合人間科や新教科群、学校行事や部活動、学校生活と対応させてみたりするとどのようになるのかを、もう一度検討したりすることも必要になってくると思う。このようなことをしていく中で、次の研究開発のテーマを見つけることも可能であると考える。

（今村敦司）